

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 29 年 6 月 16 日現在

機関番号：30110

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2016

課題番号：26750227

研究課題名(和文) 地域に在住する精神障害者に対する音楽療法の有効性を検証する

研究課題名(英文) A study of music therapy for the community people with mental illness

## 研究代表者

浅野 雅子 (Asano, Masako)

北海道医療大学・リハビリテーション科学部・准教授

研究者番号：20404791

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は地域に在住する精神障害者が音楽療法に取り組むことにより、医学的側面と日常生活的側面の両者に対しどのような効果が得られるのか、また、生活の中に音楽活動が組み込まれることによって地域生活の維持に寄与できるかの2点を検証するものである。研究が大幅に遅れ具体的な検証には至らなかったが、対象者のレベルに応じて音楽経験のない者でも失敗体験とならないよう対象者用楽譜を考案することによって音楽活動への参加は継続された。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research is to examine how music therapy involvement brings the effect on the people with mental disorders living in the community. This study especially focuses on the effect of their medical condition as well as daily living and on maintaining community living. In spite of a significant delay in the research, with regard to the continuation of music therapy involvement was well maintained. Having created a music-score-devise made a contribution to those who have no music background could have a successful and meaningful experience.

研究分野：作業療法

キーワード：精神障害 地域生活 音楽活動

### 1. 研究開始当初の背景

精神障害者に対して入院から地域生活へ移行する政策が行われており、いかに地域生活を継続するかが重要になっている。精神疾患を持つ方々は、精神症状により日常生活の困難さが生ずると医療を受けることが困難となり、さらに症状が悪化し、日常生活上の困難が増大するという悪循環に陥る。このため、地域生活の維持には医療的側面と日常生活に対する側面の両方を支援する必要がある。

音楽療法是精神症状や認知機能の改善などの治療としての用い方がある。Goldらは統合失調症者らに対し音楽を治療媒体として用いることで陰性症状の改善や対人交流を賦活するとし、Mösslerらは認知機能の一側面に対する改善を確認している。申請者も統合失調症に対し、無作為化比較試験の手法を用い、対照群を設定した上で音楽療法を介入し、精神面・認知面・行動面について検証を行った結果、先行研究と同様の結果を示した。このように、音楽療法是統合失調症者に対する医学的効果が期待できる活動といえる。

一方、主観的な効果としては、Grockeらは地域在住の精神障害者に集団音楽療法を行うことにより、QOLの改善や質的評価から喜びや楽しさを感じ、自分たちで作曲した曲に誇りを持ったことを報告している。Hannibalらは1年間音楽療法を行った精神障害者の治療継続性を調査し、通常に比して治療中断者の割合が低く、音楽療法を受けた患者は治療を継続しやすい傾向があることを報告している。これらから、音楽療法是地域生活を維持・継続させる可能性を秘めている。

以上をまとめると、音楽療法是医療的側面と日常生活的側面の両者の改善に寄与できる可能性がある。

### 2. 研究の目的

音楽は精神障害者に対する治療手段として用いられることがあり、精神症状や社会機能に対する改善のほか、認知機能に対しても改善の可能性が示されている。認知機能と社会生活能力は関連が深く、生活のしづらさを特徴とする地域在住の精神障害者にとって、音楽を利用することにより認知機能が改善されるのであれば、有益な情報になりうると考える。

よって、本研究では地域に在住する精神障害者へ音楽療法を介入し、医学的側面と日常生活的側面の両者に対する治療効果を検証することを目的とする。さらに、当事者の生活に音楽療法が組み込まれることで、地域生活の維持が可能となるかについても同時に検証する。

### 3. 研究の方法

地域に在住する精神障害者の方に音楽療法を介入し、医学的側面と日常生活的側面の両者の効果を検証する。この時、音楽療法の

内容を発表会に向けた練習とし、「目的とした活動（音楽療法）」を行うことで生活の維持につながるのかを検証する。同様に目的とした活動を行っている群（スポーツ群）と比較することで、内容の違いにより効果に違いがあるのかを検証する。なお、対象となる当事者数が限られていることや、地域活動支援センターの運営上、無作為化比較試験の手法を取り入れることが困難なことから研究デザインは擬似的実験デザインに属する時系列デザインと非等価的対照群デザインの二つを複合し、可能な限り内部妥当性を高めるよう工夫する。

具体的方法を以下に示す。

**対象**：地域に在住する精神障害者（センター利用者：実験群数十名、対照群数十名）。実験群と対照群は、入院回数、入院日数、薬物量、教育年数、年齢などの属性においてマッチングを行う。

**音楽療法内容**：小集団によるトーンチャイムを用いた器楽演奏を中心とする。毎回1.5時間、月に1回実施し、可能な限り対象者の好みに応じた選曲とする。対象者のレベルに応じて曲の変調や編曲をし、毎回の達成感を重視する。家族会の例会や忘年会での発表を目標に活動を実施する。

**検査項目**：

- 精神症状（BPRS）
- 認知機能（BACS-J）
- 社会機能（LASMI）
- 主観的評価（WHO/QOL26、地域生活に対する自己効力感尺後、生活満足度スケール）
- その他医療状況（薬物投与量や救急外来の利用回数など）、社会参加状況（就労の有無、収入の有無）、生活形態（同居者の有無など）を半構成的面接にて実施する。

### 4. 研究成果

音楽療法介入の効果について

当初は申請者の音楽療法実践フィールドである地域活動支援センターの協力のもと、音楽療法の実践と音楽発表会の企画および実施をした上で、介入前後の「音楽療法介入の効果」と「地域生活持続の効果」を検証することとした。この時、音楽群と同様に大会などを目指しサークル活動を実施しているスポーツ群、特別なサークルは利用せずにセンターのみを利用している群をそれぞれ対照群として設定し、活動内容の違いによる効果の違いについても検証する予定であった。

しかし、これらの方法は評価の実施が厳密であることから当初予定していた評価者の確保ができなかったこと、施設の職員の移動があったことなどから音楽療法は実施したものの評価の実施には至らなかった。そのため、初年度は音楽療法の実践のみとし、次年度以降は観察者による評価ではなく、参加者

本人の行動変容や活動時の発言についてテキストマイニングを用いて分析していくことのほか、毎回の演奏や発表会時の演奏記録などの分析を中心に効果判定を進めていくこととした。

この活動を継続する中、定着するメンバーがいる一方で支援センターを卒業する者も居たことから、グループの成熟度に沿って活動内容を発展させていくよりも、音楽的知識を必要とせずとも失敗体験とならず、誰もが活動に取り組めるような工夫の必要性に迫られその検討を行った。具体的には対象者が用いる楽譜について、五線譜を数字に変換した対象者専用の楽譜の考案に至った。

音楽療法の活動は地域活動支援センターのプログラムとして定着した。しかし、申請者の本来の業務とのエフォート調整がうまくいかなかったことや、毎年センターの職員の移動があったことなどから、新たに計画しなおした方法においても検証するまでには至らなかった。

#### 楽譜の考案について

精神科リハビリテーションを実施する上では“失敗体験”とならないことが重要といわれている。そのため、音楽的知識を必要とせず、楽譜が読めない方でも失敗体験とならずに合奏活動に取り組めるよう、音名を数字に置き換えた楽譜を考案した(図1、2、3)。音名のみを用いていた際は、「ドレミなんて分からないし苦手だし・・・」と話され、活動に取り組む前に尻込みすることがあった。しかし、数字を用いた際は、参加者はほぼ抵抗なく活動に取り組めた。統合失調症では注意機能や作業記憶などの認知機能障害が存在するといわれている。当初、音名を用いていた際は、音楽経験がない方にとっては馴染みに少ないものであり、このような生活上馴染みの少ないものは記憶を保持することが難しく、その結果、課題遂行がうまくいかなかったと考えられた。一方、音名に比し、数字は生活上馴染みが深いことから作業記憶が正常に働き、課題遂行を可能にさせたものと考えられた。このほか、一小節を拍で区切ることにより構造化され、視覚的手がかりが得られたことも遂行を可能にした要因と考えられた。

本人ができることや興味を持つことを提供し、誰もが参加できるよう音名を数字で表現した楽譜は初心者でも理解しやすく、失敗体験とならずに合奏活動に取り組めることが示唆された。

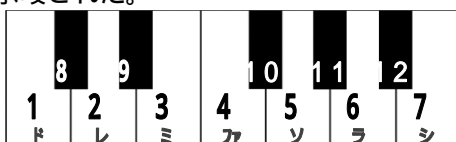


図1：音名を数字に変換

糸		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
		C	D	E	F	G	A	B	C#	D#	F#	G#	A#
4	12	4	1	2	6	5	1						
2	5	2	6	12	4	9	6						
12	9	12	4	5	2	1	4						

図2：数字に変換されたコード譜

紅葉		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
		C	D	E	F	G	A	B	C#	D#	F#	G#	A#
6	54	5	6	4	1	4	34	5	1	6	54	5	
4	6	1	4	12	4	6	6	126	1	3	4	1	1

図3：数字に変換されたメロディー奏譜

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計2件)

浅野雅子、精神科領域における集団合奏用楽譜の一考察、第30回日本音楽療法学会北海道支部大会、2016年10月30日、札幌大谷大学(北海道・札幌市)

浅野雅子、中島祥好、統合失調症患者における音楽療法 - 健常者に対して音楽が及ぼす影響との比較 -、日本音楽知覚認知学会平成27年度春季研究発表会、2015年6月7日、札幌教育大学(北海道・札幌市)

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

#### 6. 研究組織 (1)研究代表者

浅野 雅子 (ASANO MASAKO)  
北海道医療大学・リハビリテーション科学  
部作業療法学科・准教授  
研究者番号：20404791

(2)研究分担者  
なし

(3)連携研究者  
なし

(4)研究協力者  
なし